

病児保育奮闘記

(21)

子どもサポート H&K

大石 仁美

さあ～新しい出発だア

赤ちゃんはジュエリー！

病明けから久しぶりに出勤しましたら、お客様は赤ちゃんで4か月の女の子でした。初めての来室です。「こんにちは赤ちゃん♪ こちょこちょ、むにゅむにゅ、可愛いねえ。」なんだかちょっと気恥ずかしさを感じながらの対面でした。本当に赤ちゃんは宝物というのが実感です。

咳がよく出るので…ということでしたが、熱もなくニコニコ。5歳になるAくんの妹です。ママは産休明けで仕事に出るとすぐ会員登録。そして即利用となった次第。

第2子、第3子と生まれてすぐ登録して、早い段階から利用してくださる方が増えています。嬉しいですね。

お母さんの表情や言葉から、信頼していますよと気持ちが伝わってくるのが嬉しいです。そ

れと、「このかわいい子を早く見てほしい！」という気持ちが溢れているのもわかります。だって病児というほどでもない子を、お金がいることを承知で連れて来られるのですもの。

あやすとその涼しいきれいな目でじっと見つめてくれます。恥ずかしいくらい見つめられて、やがて大人が赤ちゃんと同化していく瞬間。無心で純な心を取り戻す瞬間を味わうとき「癒される～っ」と感じるのですね。

信頼されて、喜ばれて、こちらも楽しませてもらって、ほんと申し訳ないくらい。この仕事の醍醐味です。もちろん、月齢が進むと大変なこともいっぱいあります。人見知りが激しくて大泣きされたり、食事を拒否されたり・・・でもそんなことは大したことではありません。時間の経過とともに変わっていくからです。

親でもない大人が、子どもの成長の過程に付

き合えるなんて、保育士ってほんとに素敵な仕事だと思います。とりわけ私たちのような、会員制の病児保育室は、一人の子に濃厚な関わりを持つわけですから、一般の保育園とはまた違ったその子どもと保護者を含めた関係性が築かれていきます。

キーワードは安心と信頼

開設してから16年が経ちました。目を閉じると次々といろんなことが思い出されます。あんなこともあったなあ。こんなこともあったなあ。あの親子は今頃どうしているかなあ。当時の情景が脳裏に浮かぶ度に胸が熱くなります。

当初はまだ若かったなあ、私もパートナーも。こんなことがしたい。こんな風にしよう。思いついたことはどんどん実行に移しました。性格や考え方がまるっきり違っても、目指すところは同じでしたので、お互い補い合って助け合ってやってこれました。本当に有難いことでした。

工夫しながら、誠実に、そして楽しんでやってきたから、16年続くことが出来たのでしょう。そこに安心と信頼が担保されたのだと思います。そう考えると感無量です。

子育てで思うこと

児童虐待が世を騒がせている昨今ですが、うちの利用者さんは、真逆の世界に住んでいるなあと思うことがよくあります。(それはそれでしんどいことなのですが)

数年前に遠方に転居されたBくんご一家。「一年生になりました」といって、スーツ姿におめかしをしたBくんを真ん中に、満面の笑顔のご両親の写真を送っていただきました。Bくんは赤ちゃんのときから茶目っ気いっぱいのかわいい子でした。その子が愛情いっぱいになり、晴れの日を迎えた一枚の写真。ああ、こんなに立派になって… 胸が熱くなりました。

ご両親は結婚されて10数年子宝に恵まれず、諦めた頃にやっとお子さんを授かったのです。その喜びは筆舌に尽くしがたく、まだ妊娠中であるにもかかわらず、生まれた暁にはどうぞよろしくお願ひしますという長いお手紙をいただいたほどです。

お母さんはもちろん高齢出産でしたが、お父さんもかなりご高齢で、若い人に比べ肉体的にはかなりしんどかったらうと思われまふ。仕事を終えてお迎えに来られた時には、両親揃って疲れ切った御様子で、睡眠不足も重なっているように身体を壊さないかと気をもみました。しかし流石に人生経験豊かな分、落ち着いておられ、子どもを見つめる目に愛おしさが溢れていて、側にいるほうが癒されるほどでした。

ある日、Bくんを袋状の抱っこ紐に包んで帰られるのを目撃しました。すでに3歳ちかくなっていましたので、いくらなんでもそれは・・・と声をかけましたら、「よくわかっているのですが、手を振り払って急に走り出したりするものですから。車の通る道は危なくて。私たちでは追いつけないのです。とおっしゃいました。仕事と子育てに全力を費やして余力は残っていないのですね。過保護だと笑う前にカンガルーのように袋にすんなり収まっている彼を見て、それぞれのお家のありようでいいのだと素直に思いました。

Bくんはじめ、大切に育てられた子どもは皆優しいというのが実感です。お友達への思いやりも自然に育っていきます。それは子ども同士の遊びを通して、よく目にするところです。

わがママを許すのとは違ひます。「自分は大切にされている」と全身で感じ取るところからきているように思われまふ。

私は、笑顔でやさしく子どもを見守っているお母さん、優しい声で言葉をかけているお母さ

んを見ると思わず見とれてしまいます。尊敬の念と同時に羨ましいという気持ちも沸いてきて、その場面を自分の娘に見せたいといつも思うのです。そして、学んでほしい。娘の子育てを見ていると悲しくなり、胸がうずきます。自分の心の奥の過去の乾いた傷跡がえぐられるようで、嵐を上手くやり過ごす術も知らず、無知で無鉄砲でバカな自分の行動のツケが大きすぎることに愕然とするのです。過去は元には戻りません。

私は口うるさい母が嫌いで家を出た人間です。それなのにシングルになって忙しい事を理由に、夏休みには子ども達を母に預けて、自分の時間を確保していました。今思えば好きなように生きてきたのです。仕事人間にとって、長期休暇中の子どもの世話は大変です。それを嫌がらずに、(もしかしたら嫌だったのかもしれませんが) 三人の面倒を見てくれた母には今更ながら感謝と申し訳なさでいっぱいです。しかし娘が母親になったとき、初めてツケの大きさを思い知りました。

娘の子育てを見ていると、「あれをしなさい、これをしなさい」と指示命令が多すぎて、指示に従わないと、劈くような大声で叫ぶのです。思わず耳をふさぎたくなります。ああ～私の母親にそっくり！私が一番嫌いだったこと！

「自分の思うとおりに子は育たないよ。注意が多すぎると聞き流すクセがつくからね。」そう言っていさめると

「私が子供の時、お母さんは何も言ってくれなかった。勉強しなさいといわれたことは一度もなかった。言ってくれてたら、もっと勉強して違う生き方もできたのに。子どもにはきちんと教えておかないと。他のお母さんみたいに。」

グサッ。放任だったということか。

違う、違う！おやつも一緒に作ったじゃないか。パンやシュークリーム、かぼちゃドーナツ

もつくったよね。つくし摘みもみんなで楽しんだし、隣町までモダンバレエのお稽古や水泳教室の送迎もしてたよな。出来ることは、やってたつもりだよ。

ただ・・・言葉かけが足りなかったのは確か・・・自分の気持ちや考えをよくわかるように砕いて話すことはしなかったし、子どもの気持ちを丁寧に聞き取るということもしなかった。そのツケが回ってきて、いま娘は、子どもの気持ちを聞くこともなく、自分の思う通りに動いてくれない子どもを叱り飛ばすだけの口うるさい母親になってしまっていたのです。それもかなりの暴言でもって。

ああ、なんということだろう。私が子どもの頃、傷ついたのと同じ事が再現されている。自分の生き方が孫にまで深刻な影響を与えることになるなんて。いまさらながら、じぶんの罪深さに恐れおののく私です。

発達障害と診断された孫もいるので、子育てが大変なのは事実です。実際しんどいだろうと思います。でもよく見ていると、欲張りすぎなのです。なんでもできる子になんて妄想は捨てたほうがいい。出来ないことを出来るようになって思わないほうがいい。出来ることをもっとできるように応援してやればいいのです。例えそれがわずかであっても。全てにおいて優秀な子はもちろんいるでしょう。でも我が家は優秀な家系ではありません。

日常生活が何とか出来て、好きなことに熱中出来る、そうした子どもであればそれで十分。

宿題が多すぎて、すぐ点数に結び付ける学校とは、一線を画していいと私はおもっています。これ以上劣等感を持たせないよう、私にできることは出来るだけ援助しよう、その線で行こう。そう腹を決めているのです。

子どもサポートの利用者さんに対しても、観

察を通して、その子の良いところをどんどん見つけて親に報告してあげたい。それが一つ。また家で困っていることがあれば、それがどうしてなのか、子どもの心に踏み込んで解決策を親御さんと一緒に考えていきたい。その二つが私の使命。病児保育といっても、ほとんどの子どもは寝ているわけではなく、遊びに興じているのですから、そこから見えていることは一杯あるわけです。

公私ともに私のやるべきことははっきりしたので、理解してくれる仲間たちの助けを借りながら、さあ、前進です。